



過剰

ぼくは、毎日眠れなくて困っていた。そこで、眠りの国から、眠りのスペシャリストを招き、眠る訓練を受けることにした。

「お願いします。先生」

「ええっ！先生なんて、今まで呼ばれたことなかった！」

「だって、先生は、眠りのスペシャリストなんでしょう？」

「そうはいつでも、私の国では、眠ることなどしごく簡単なこと。それに、私はスペシャリストと言っても、誰よりも長く、誰よりも早く眠れるだけのこと。あなたに教えてあげられることがあるかどうかわかりかねます」

失敗したかなあとぼくは思った。けれど、高いお金を払って来てもらったのだから、この機会を無駄にするわけにはいかない。少しでも眠りの極意を知って、質のよい睡眠を手に入れなければならない。そうでないと、ぼくはもうお肌がボロボロだし、頭もボロボロだし、ぞうきんもボロボロだったのだ。

「まずは、なにをすればいいですか？」

「そ、そうですね。まずは、靴下を脱ぐところからはじめましょうか」

「あ、はい。そうですね」

ぼくは、紫色の靴下を脱いだ。

「それから、パジャマに着替えることです。パジャマとは言っても、パジャマ用に作られたパジャマじゃなくてもいいんです。あなたにとって、一番気楽で、一番心許せる服を着てください。」

「一番気を許せる服ですか」

ぼくは、小学生の時から着ている、Tシャツを取り出した。

「これでいいんですか？」

「あ、この首周りのよれよれ感、いいですね。素敵です」

下は、普通のパジャマにすることにした。ぼくはさっと着替えると、その次の指示を待った。

「次は、何をすればいいですか？先生」

先生を見ると、もう先生も、お気に入りのナイトウェアを着用していた。全身ピンク色の、パジャマらしいパジャマだった。

「先生は、パジャマなんですね」

「いけませんか？！すみません！私、先日これを購入しまして、とても気に入ってしまったものですから」

中年のおじさんが、ピンクのパジャマを着用しているというのに、なぜか異様に似合っていた。

「いえ、すごく似合ってます」

「あは、そうですか」

「じゃあ、次はどうするんですか？」

「はい。次は、一緒に眠るぬいぐるみを選びます。」

「ぬいぐるみですか？枕や、シーツではなく？」

ぬいぐるみと寝たことなど、今までの人生で一度もない。

「これは、非常に重要です。あなたのぬいぐるみを、まず見せてください」

「あの、ぼくぬいぐるみは一個も持ってないんですけど」

「そんな！！」

そう言ったまま、先生は、しばし打ちひしがれていた。

「でかけましょう」

「え？」

「いまから、お気に入りのぬいぐるみを、選びに行きましょう！」

「え？もうパジャマに着替えちゃったんですけど！？」

「上からコートを羽織れば、大丈夫です。さ、早く！」

言われるがまま、ぼくと先生はコートを羽織り、外へ飛び出した。

ぬるい風が、パジャマの裾からすうーっと入ってくる。

「先生、どこへ行くんですか？」

「行けば、わかります」

そうしてぼくらは、ゲームセンターについた。

そして先生は、クレーンゲーム機のガラスに張り付いた。

「さ、どれにします？かわいいぬいぐるみが、待ってますよ」

「どれにしますといわれても」

「どれにピンとききますか？」

「えーっと……」

じゃあこれ、と指さしたのは、なんてこともないねこのぬいぐるみだった。

「えー、それにするのですか？こっちじゃなくていいんですか？」

先生が指さしたのは、得体のしれない古代魚のぬいぐるみだった。

「いえ、絶対こっちです」

ぼくは先生に流される前に、コインをゲーム機に投入した。

ギーギーと言って、クレーンはぎこちなく動き出した。ボタンを離す前に、クレーンがストップした気がした。ゆっくりとクレーンが手を広げ、ぼくの選んだねこのぬいぐるみの頭をかすった。けれどかすっただけだったので、クレーンは手持ちぶさたのまま、定位置に帰っていった。

「やっぱり、だめですね。お店で買った方が安くすみますよ。おもちゃ屋さん行きましょう」

「わかってないですね。クレーンゲームは、一回で取るものではないのです。何回も時間をかけて、少しずつづらして行って取るのが基本ですよ。まだ一回目ではないですか。さあ、二回目は、もう少し頭を手前にずらしてください」

自腹なのにも思いながらも、ぼくはまたコインを投入した。チャリンという音が、せつなかった。

結局18回やって、ぼくはようやくねこのぬいぐるみを手に入れた。絶対に、普通に買った方が安かった。けれど先生は、そんなことはお構いなしに、ぼくのことをほめたたえた。

「すばらしいですよ。すばらしい。これこそ、あなたが選んだ、あなたのためのぬいぐるみです」

帰り道は、先生は小走りになっていた。ピンクのパジャマの裾がひらひらとたなびくのを見ながら、ぼくも小走りで、先生のあとについて家に帰った。

家につくと、先生は息を切らしていた。

「水を、一杯もらえませんか」

ぼくは先生に水道水をあげた。

「あなたも飲みなさい。睡眠中は、汗をかくんですからね」

「はい」

ちょっと塩素臭い味がした。

「さあ、では、寝ますか」

やっと本題の眠る学習タイムが来た。とぼくは思った。

「先生、コツはなんですか？」

「え、コツ?!」

「それは、布団に入ってからお教えしましょう」

あきらかに動揺しながら先生は言った。

布団に入ると、先生が電気を消してくれた。

「さあ、おやすみなさい。ミーミーちゃんとともに」

勝手に命名されたねこのぬいぐるみを布団の中に一緒に入れられ、ぼくは目を閉じた。

いつもならここから、何時間もの眠れない苦しいときがおとずれる。

しかし今日は違っていた。

すーすーと先生の寝息が聞こえて来た。

「え?!もう寝たんですか?」

ぼくは慌てて飛び起きた。豆電球の明かりのもとでタオルケットをかぶった先生が、静かに寝息をたてていた。
「はやっ」

「これからいろいろ教えてくれるんじゃないのかよ」

結局先生からは、パジャマの選び方と、一緒に眠るぬいぐるみの選び方しか教わっていなかった。

ま、いいか。

さっき小走りしたので、ちょっと疲れていた。ぼくはまた目を閉じた。

そこからは記憶がない。目を開けると、きれいに畳まれたタオルケットの上に、「講習代として」と書かれた領収書が置かれていた。

あける

この冬は、なんだか調子が悪かった。ずっと風邪を引いていて、いつも寒気がしていた。

今日もいつもの病院に行こうと、私はバスに乗り込んだ。

熱はないけれど、喉がヒリヒリしていた。閉まった窓からでも、冷気がひんやりと伝わって来て、私は思わずカーテンを開けた。少し眠ったあと、目を覚ました。そろそろ降りるバス停に近づく頃だろう。

私はカーテンを少しだけ開けた。そして、息を飲んだ。飲んだとたん、鈍い痛みが喉に走った。

さっきまでの雪景色が一変して、道路の脇には春の緑が広がっていたのだ。

こんな緑をたくさん見たのは、久しぶりだ。

一気にこんなにとけるはずもないし、それにこの道路は、まったく見たことのない道だった。

もしかして、違うバスに乗ったのだろうかと思いは思い、改めて、バスの行先表示を見てみた。しかしそこには、「知らぬが仏」とだけ書かれてあった。そんな名前前のバス停などあるだろうか。これはおかしいと思いは思った。周りの人に聞こうと、私は背筋を伸ばし、辺りを見回した。しかし、誰も乗っていない。それでは運転手に聞こうと、私は席を立とうとした。するとすかさず「危険ですので、バスが止まるまでお立ちにならないでください」と放送が入った。私はまた、ごくんと唾をのみ込んだ。喉の痛みがさらに増している。私は声を振り絞り、「あの、このバス、どこ行きですか？間違えちゃったみたいで」と、その場で聞いてみた。しかし、バスの運転手は何も答えてはくれなかった。運転中は話しかけないでくださいと、怒ってさえもくれなかった。

とりあえず、落ち着こう。と思いは思った。カバンからのど飴を取り出すと、それを口に入れた。スーッとするカリンの味が、喉に染み渡った。もう一度、カーテンを開ける勇気が湧いた。そっとカーテンをあけると、相変わらず緑の中の一本道を、バスは走っていた。しかもさっきよりスピードが増しているようだ。ぐんぐんぐんぐんと緑が過ぎていき、目でも負えないほどだった。

バスは、トンネルに近づいていた。そして、トンネルの手前には、誰か人が立っていた。その人の隣を横切る時、私は「あ」と思った。それは知っている顔だった。もう15年以上会っていない人だ。

懐かしいな。と思いはその人に手を振った。その人も手を振り返してくれたかもしれないが、バスはすぐトンネルに入ってしまった。その人はあつという間に見えなくなってしまった。

「あ～あ。バスじゃなかったら、止まってお話しできたのに」

と思いはつぶやいた。ハツとして、運転手の方を見ると、何も聞こえなかったかのように運転手は運転に集中していた。

それにしてもこのトンネルはいつまで続くのだろう。

トンネルに入ってから、しばらく経っている。

トンネルの壁に、「あと何キロ」という表示がないか、さっきから私はカーテンのすき間から外を覗いていた。

しかし、そのような看板は何もないし、オレンジの光だけが不気味にトンネルの壁を照らしているだけだった。一体、どのくらい時が経ったのだろうか。もしバスを間違えていなければ、とっくの昔に病院について、診察しているころだろう。しかしバスは止まる気配を見せない。

「すみません、次のバス停までどの位ですか？」と思いはもう一度勇気を振り絞って尋ねた。しかし、思った通り、返事は来なかった。このままでは、違う県まで行ってしまいそうだ。

私はため息をついた。もうだいぶ来てしまったけれど、ここで降りて、歩いて帰った方がいいのではないか。そうすれば、あの人にも会えるし。私はそう思った。

「すみません、ここで降りてもらえませんか」

しかし、返事はなかった。

バス停以外のところでは、降りてもらえないきまりでもあるのだろう。

私はしかたなく、また席に落ち着いた。

ふうーっとため息をつく。そしてもう一度、カーテンのすき間を開けてみた。

すると、そこにはお花畑が広がっていた。黄色い花たちが、わんわん咲いている。

いつの間にトンネルを抜けたのだろう。

わあー

と私は思わずさっきと違ったため息をついた。

ブーとその時突然音がした。

へ？だれか降車ボタンを押したの？そう思って、私はもう一度後ろを振り向いてみる。

するとそこには、男の子が座っていた。

眠そうな目をしている。

そうか、私の他にも乗っている人がいたんだ。

「次は～病院前止まります」

それは、私が降りようと思っていたバス停の名前だった。

「降りなきゃ」

私は慌てて、カーテンを元に戻そうと、全開にした。

驚いたことに、そこは元の雪景色に戻っていた。

「～病院前～病院前」

バスはゆっくりとバス停に停まった。

男の子がさっと私の横を通り過ぎ、バスを降りて行った。

それを見て、私も慌てて席を立った。お金を出すのに手間取ってしまい、ようやく整理券を探し出して料金箱に入れた時、私は、さっきトンネルの前で見かけたあの人が、もう会えない人だったことに気がついた。

バスが行ってしまい、私はゆっくりと今来た道路を振り返った。

ここに来るまでに、トンネルなんか今まであったらろうか。

あったような、なかったような。

早く元気になろう。

私は病院への一歩を踏み出した。

【2018-02-16】指さし小説 第23話

<http://p.booklog.jp/book/120355>

今回は、「過剰」というテーマでした。過剰反応とか、過剰サービスとか、せっぱつまったものを感じる一方、わんこそばのような、面白さも感じる。そんな過剰なお話を書きたくて書いてみましたが、そんなに過剰じゃなかったかもです。結局気持ちよくねむれてるしね。

第24話

配信が遅くなり、本当に申し訳ありません！

今回のテーマは、「あける」でした。今回は、韓国語の辞書を使って、「(穴などを)あける」で、トンネルなどを通すという意味もあることばだったので、つい最近通ったトンネルのことを思い出し、またまたタイムリーだなと思って作りました。

著者：かっこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/120355>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト